

「ア ア メ ン」

イザヤ書 第65章16節
コリント人への第二手紙 第1章18節～22節

説教 村上修平牧師

主の祈りの最後の言葉は、「アーメン」です。世界中どこに行っても、「アーメン」という言葉は同じです。「アーメン」と言えば、違う国の人とでも心が通じ合えるのは、嬉しいことです。この「アーメン」はヘブル語です。旧約聖書に「真実の神」（イザヤ書65章16節）とあるように、「アーメン」には《真実な・確かな・信頼できる》という意味があります。ですから、主の祈りの最後に「アーメン」と唱える時、私たちは、『確かに、その通りです』と確信していることとなります。

けれども、少し考えてみると、私たちはいつも『確かに』と確信しているのでしょうか？『われらの日用の糧を今日も与えたまえ』と祈りながら、生活の心配をしてしまうことがあると思います。また、辛いことや悲しいことがあって、祈りの言葉さえ口に出せない時もあると思います。私たちの信仰がぐらついている時、どうして胸をはって「アーメン」と祈れるのでしょうか？

使徒パウロは、コリント教会の信徒達に、「兄弟たちよ。わたしたちがアジヤで会った患難を、知らずにいてもらいたくない。わたしたちは極度に、耐えられないほど圧迫されて、生きる望みをさえ失ってしまい、」（コリント人への第二の手紙 1章8節）と述べています。パウロの伝道は苦勞の連続でした。福音を喜んで受け入れる人もいましたが、中には敵対する人もいて、あのパウロでさえ、『もうダメだ』と希望を失ってしまうようなひどい迫害も経験したのです。しかしパウロは、自分の耐えられる限界を超えて、もう生きる望みも見いだせない時に、「…自分自身を頼みとしないで、死人をよみがえらせて下さる神を頼みとするに至った」（9節）と言います。

パウロは、これまで何度も大変な目にあってきましたが、その度に神はパウロをその苦しみから助け出して下さったことを思い起こし、神は真実で信頼できる方だと気づいたのです。そして、これまで私を助けて下さった神は、これからも私を助けて下さるに違いないと信頼しました。「なぜなら、神の約束はことごとく、彼において『しかり』となったからである」（20節）とあるように、キリストによって私たちは『しかり、確かに』と確信できるのです。

私たちは祈る時、最後に『主イエスの御名に

よって、アーメン。』と祈ります。たとえ、私たちの心がどんなに動揺していても、主イエスが私たちを支えて下さいます。清い立派な心で祈らなければならないとしたら、いつまで経っても祈ることなどできないでしょう。私たちは不安だったら不安なままで、信じられないのだったら不信仰なままで、誰かを許せないのだったらその憎しみを抱えたままで、ただ主イエスによりすがって祈ったらそれでよいのです。鉄棒にぶらさがるとき、自分の体の重みに耐えきれず、いつかは手を離してしまうものです。けれども、主イエスは私たちが手を離すまさにその時に、私たちの手を上から固く握りしめて下さるので、主イエスの力強い御手は、私たちをしっかりとつかまえて、絶対に離すことはありません。

礼拝の中で、小さな子供が「アーメン」とひととき大きな声で叫ぶのを聞いて、はっとさせられます。大人が理屈でものを考えて「アーメン」と確信できない時も、子供は神を信頼することの大切さを教えてくれます。ある婦人の証しを紹介します。ある婦人と孫娘と一緒に家に帰ると、玄関の鍵が閉まっていた。鍵を忘れて中に入ることができませんでした。孫娘は目に涙を浮かべて、『おばあちゃん、どうやって家に入るの？』とききました。婦人は、孫娘を力づけようと、『私が側についているし、なんとか家に入れるようにするから、私を信じてくれる？』と言いました。すると、孫娘はうなずいて、もうどうやって中に入れるかと尋ねようとせず、婦人の側で遊び始めました。婦人は、孫娘の姿を見て、『信頼』ということ学びました。

大人は問題が起こると、なぜこのような問題が起こるか、どうやって切り抜けようかと考えて、自分が納得できなかつたり、自分の手に負えないと思うと、不安やパニックになります。けれども、子供は自分が理解できない事でも信じていることができます。私達も子供のように主を信頼したいと思います。主イエスは、あの十字架の上で命までも捧げて、私たちを確かに愛して下さいました。私達が祈れない時も、主イエスは私達の内、「アーメン」と大きく叫んで下さっています。目に見える現実がどうであれ、主イエスが大丈夫と言って下さるから、私達は大丈夫なのです。

（記 村上修平）